

授業作り	重 点	ICT 機器の効果的な活用の推進
環境作り		授業のユニバーサルデザインを意識した学習環境作り

■ 学年の取組について

学 年	学習状況の分析 (各種調査から)	学校が取り組む目標 (日常の授業の様子から)	目標達成のための取組
1 学 年		<ul style="list-style-type: none"> <li>・「です」「ます」などの丁寧な話し方、書き方を身に付ける。</li> <li>・ひらがな、カタカナの定着を徹底する。</li> <li>・数え方、たし算やひき算の場面を想定することなど、分かりやすく説明できるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 文字のバランス、形、とめ、はねなどの基本を繰り返し練習する。</li> <li>② 各教科で話し方を徹底する。</li> <li>③ 具体物を用いて、児童が説明する時間を設定する。</li> </ul>
2 学 年		<ul style="list-style-type: none"> <li>・計算は、9割の児童が定着しているが、漢字は個人差が大きく、ばらつきがあるので、定着を図っていく必要がある。</li> <li>・答えは出せるが、理由について、自分なりの言葉で考えを表現することを練習する必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 漢字練習、計算練習の取り組みと小テストの実施</li> <li>② ノート指導の徹底と指導の工夫</li> <li>③ 各教科における自分の考えを表現する時間の設定</li> <li>④ デジタルドリルの活用</li> </ul>
3 学 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新宿区学力定着度調査では「話すこと・聞くこと」の領域で、全国より4ポイント高いスコアだった。</li> <li>・新宿区学力定着調査では「数と計算」の領域で全国より2ポイント低いスコアだった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「話すこと・聞くこと」においては、個人差があり、内容を的確にとらえられていない児童もいるので、授業で練習していく必要がある。</li> <li>・板書に書かれている通りに、ノートに写すことが難しい児童がいるので、ノート指導を徹底する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 「聞く小テスト」の実施</li> <li>② 対話による意見交流</li> <li>③ デジタルドリルの活用</li> <li>④ 計算練習の取り組み</li> <li>⑤ 実物投影機でノートを写すなどの板書</li> </ul>
4 学 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新宿区学力定着度調査では、国語、算数ともに区の平均と同等である。</li> <li>・国語「情報の扱い方」の領域の正答率が低い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人の学力差が大きく、特に算数では習熟度別学習を含めた個別の丁寧な指導が必要である。</li> <li>・教材や資料から分かったことをまとめる力を身に付けさせる必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① デジタルドリルの活用</li> <li>② 各教科における自分の考えをノートにまとめる時間を設定する。</li> </ul>

<p>5 学 年</p>	<p>・新宿区学力定着度調査では、国語、算数ともに区の平均を上回っていた。</p> <p>・国語の「書くこと」の領域や記述式の正答率が低い。</p>	<p>・学力の差が大きく、苦手な児童は前の学年の学習内容から復習し直すことが必要である。</p> <p>・どの学習においても、自分の考えを書くことや、友達の考えを聞いて比較・検討できるようにする。</p>	<p>① デジタルドリルの活用</p> <p>② 各教科で自分の考えや授業感想を書く時間を設ける</p> <p>③ 相手意識をもって作文を書く宿題を出す。</p> <p>④ 漢字の小テストを実施</p> <p>⑤ 習熟度別にドリルやワークシートを活用し、書くことに対する苦手意識を取り除く</p>
<p>6 学 年</p>	<p>・国語においては、いずれの観点も高い成果が得られていることが分かる。特に「書く力」の高さが顕著であった。</p> <p>・算数においては、基礎、応用いずれも平均値より上回っていて、定着度が高いことが分かる。</p>	<p>・国語においては、高い成果が得られている言語化について、その「活用」に重点を置く。具体的には、議論、討論等、対話的な学習において、協働的に問題解決を図る力を伸ばす。</p> <p>・算数においても、国語と同様の目標を設定する。個人のもので、問題解決を図ることは出来ているが、互いの気付きや考えを言語化し、協働的に問題解決を図ることについては、さらに力を伸ばしていく必要がある。</p>	<p>① 問題解決型の学習展開の推進</p> <p>② 言語化する場面の意図的な設定</p> <p>③ 問題把握、自力解決、対話的・協働的な問題解決、といった学習過程の設定</p> <p>④ 学習を深めたり、新たな課題を発見させたりできるように、適正な評価を行う。</p>